

---

# 私の友達

久住 なつき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の友達

### 【Nコード】

N3301A

### 【作者名】

久住 なつき

### 【あらすじ】

いつも思う。私の友達は個性が強くなって。

私の友達は、個性の強い子ばかりだと思う。

「藍ちゃん、聞いて聞いて！」

「どっしたの？」

「土管がドツカーン！」

「……」

「布団が吹っ飛んだー！」

「……」

多分誰もが一回は聞いたことがある、絶対受けない親父ギャグの王道を二連発も言っただけなのは、宮本 美華ちゃん。どんなにスベつてもめげずに笑わせようとしてくれる良い子です。

例えば自分の一言で場の空気が変わろうとも、全然気にしません。フオローする様子も全く見られません。むしろ何時の間にか周りの人のせいに行っていたり。

「藍ちゃん、ちゃんと突っ込まなきゃ」

できるなら何か突っ込んであげたかったよ？ だけど美華ちゃんのギ

ヤグ、突っ込みづらいんだもん。私を巻き込んで更にひどく滑りそうな感じ。いや、滑るって言うっても今は私と美華ちゃんだけだから気にする事もないけど。でも、やっぱり滑るのは怖いって言うか・・・。

「アルミ缶の上にある蜜柑！」

「な、なんじゃその庶民的な蜜柑と最近見かけないアルミ製の缶の「コラボは！」

「・・・」

「・・・」

「藍ちゃん、立ち止まってないで歩こうよ。学校遅れちゃうよ?」

「・・・ハイ」

私の良い所は、何だかんだ言っても結局は突っ込んであげる所だと思っただ。だけど美華ちゃんは認めてくれないんだね。藍、泣いちゃう。まあいいや。学校へ行こう。

学校についた。美華ちゃんと教室に向かっていると、後ろから可愛いらしい声が。

「おはよあ〜」

振り向くとにつこり笑顔の女の子。癒し系っていう言葉はこの子のために作ったんだねと思わせるこのお嬢さんは倅澤 ゆこちゃん。本当に本当に・・・(エンドレス)可愛い子です。

「ゆこちゃん、今日も本当に可愛いね」

「え〜、そんな事知ってるよあ〜」

超古典的な口説き文句にもいちいち包み隠さず正直に反応をしてくれます。うん、素直だよね。私は可愛いゆこちゃんが大大・・・(エンドレス)好きです。ゆこちゃんなら何でも許せる気がします。

「藍ちゃんも男の子に結構可愛いって言われてるけど、あたしの方が可愛いと思うんだあ。そこそこ、ちゃんと分かってくれて良かった〜」

でも同時に心の何処かで全力で殴ってやりたい、という気持ちが芽生える気もします。

「あ、そだ藍ちゃん、美華ちゃん。教室ついたらクッキー上げるね。昨日お母さんと作ったんだあ」

全力で殴ってやりたいと言うのは私の気のせいだったようです。さっきのビバ自分発言も許せちゃいます。ゆこちゃんは正直者で友達想いで餌付け上手の可愛い子です。

「ありがとう。お礼に新しいギャグ聞かせて上げるね。さっきもう

藍ちゃんには聞かせたけど」

さっきのギャグって最新だったんだ。美華ちゃんって昭和っ子？ちやんと平成の世についていけてるのかな。あ、でも美華ちゃんって流行とかスルーしそう。GOING MY WAYフウー！！って感じ。あ、フウー！！って知ってるかな？

教室に入ると私と美華ちゃんはすぐさまゆこちゃんの机へ向かった。

「はい、どうぞお」

ゆこちゃんから差し出したのはスーパーのビニール買い物袋に入ってたクッキー。手間とお金を掛けてラッピングをしてもすぐに開けるもんね。ゆこちゃんは地球に優しい子だなあ。

「美味しいか分からないけど食べてみて」

「じゃあ早速いただきまーす」

「いただきまーす」

パクパク……。うーん……。どうしよう、不味い。ゆこちゃんは王道でベタな間違いを犯したらしい。

「どお？不味い？」

「えっとね、えーっと……。どう？藍ちゃん」

「え？え？うーん・・・」

「やだあ、あたし塩と砂糖の量間違えちゃった」

やっぱり、ゆこちゃんは王道でベタな間違いをしていた。よくある、よくある。ってちょっと待て？

「ゆこちゃん、何で食べてないのにクッキーが不味いつて分かるの？」

「・・・えへへ、気づいちゃった？この失敗一度やってみたかったんだあ」

「・・・いいなあ、ゆこちゃん！そのポケ羨ましいよー」

「・・・」

時々なんでこの子達と友達やってるんだろって思っよ。

「ごめんね？」

・・・でも確かに気持ち分かるなあ。私もやってみたいもん。漫画やドラマみたいで面白そう。

「まあまあ藍ちゃん。面白かったからいいじゃん」

「本当のクッキーも持ってきてるから、それ食べよお」

私の友達は個性の強い子だ。

私はそんな友達が何だかんだいって大好きだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3301a/>

---

私の友達

2010年11月24日15時40分発行